

静岡県大井川上流域におけるアクセント変化：無アクセント地域におけるアクセント獲得(斎藤武生先生 退任記念号)

著者名(日)	木川 行央
雑誌名	言語科学研究：神田外語大学大学院紀要
巻	14
ページ	103-124
発行年	2008-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1092/00000464/

静岡県大井川上流域におけるアクセント変化 — 無アクセント地域におけるアクセント獲得 —

木川 行央

1. はじめに

静岡県榛原郡本川根町（現榛原郡川根本町。本稿では調査時点での地名を用いる）は大井川上流域であり、その方言の特殊性で有名な静岡市井川（現静岡市葵区井川）に隣接する地域である。井川と本川根の境界には接阻峡という難所があり、上流の井川からは大日峠・富士見峠を越えて安倍川流域へ、本川根からは大井川に沿って下流へ、あるいは山越えをして安倍川の支流である藁科川ぞいに静岡市街地域へという道が主として用いられてきた。直接井川と本川根を結ぶ道の重要性は低く、現在でも井川・本川根間は、大井川鉄道井川線を除けば、林道があるのみである。しかし、ことばの面では、本川根と井川は連続する特徴を持つ。例えば、否定を表す形式としてノーを用いる点は、本川根と井川で共通し、静岡市街地域あるいは大井川下流域のことばと異なる点である。また、中條修（1983a）によれば、行カッ・見ッのように未然形に促音がついた形が意志・勧誘表現で用いられたり、行ッソ・見ソのように連用・音便形にソが接続した形が禁止表現として用いられるといった現象が井川にあるが、本川根町北部の梅地・犬間でもこれが使用されるという。また、これら文法事象以外にも、周辺地域にはないが、共通して分布する語があり（木川行央1996～2006、木川2002等）、無アクセントであるという点でも共通している。

本稿は、2004年度に実施した本川根町小長井地区および静岡市井川における調査から、現在の当地域におけるアクセントの状況、およびその変化の様相がどのようなものであるかを見ようとするものである。

2. 調査の概要

静岡県中部における無アクセントの地域は、井川から本川根、中川根町の北部、さらに静岡市の藁科川上流域にわたるが（寺田泰政1971、中條修1983a、

言語科学研究第14号（2008年）

山口幸洋1987他)、この地域でも次第にアクセントを獲得しつつあると言うことが、井川を調査した馬瀬良雄（1981）や中條修（1983b）などで報告されている。これらは1980年に実施された調査によるものであるが、本稿ではこれらの報告から20年以上を経過した、井川に隣接する本川根町の現況を報告することとなる。また、今回の調査は調査時点に当該地域在住の住民全員を対象とした。本川根は山間の町ではあるが、近隣地域はもとより、県内・県外の様々なところから来た人たちによって、構成されている。従って、テレビ・ラジオなどだけではなく、近隣の人からも、伝統的な本川根のことばではないことばが日常的に聞かれる。今回の調査は、これらの人達の言葉を含めた総体としての本川根のことばを捉えることを目的としている。また、本川根の若年層のことばとの比較のため、井川においても中学生を対象とした調査を実施した。

調査は、2004年10月に実施した。アクセントに関連する調査は以下の通りである。

I 本川根町藤川小長井における面接調査

本川根町は、1956年志太郡東川根村と榛原郡上川根村が合併して生まれた町である（さらに2005年中川根町と合併し川根本町となる）。この東川根村の中心、村役場のあったのが大字藤川（合併後の現在の字名は東藤川）の小長井（2003年4月現在の戸数は216戸、人口は607人）である。今回は、この小長井にある17組のうち、中心部にある1つの組および町営団地の全数調査を目指した。前述のように、対象となるのは、出身地に関わらずこの対象地域に住む全員であるが、実際に調査が行えたのは68名である。調査は2004年10月12日～15日にかけて、話者のお宅に調査員が伺って実施した。調査項目は言語意識・文法・語彙そしてアクセントである。アクセントの調査は、読み上げ式で、単独の語を2回、助詞を付けた単文を2回読み上げてもらった。調査した語は以下の通りである。

- | | |
|------|---|
| 2拍名詞 | 1類（飴、鼻）、2類（胸、歌）、3類（犬、花）、4類（糸、肩）、
5類（雨、秋） |
| 3拍名詞 | 雀、鯨、苺、背中、男、表、頭、力、心、一つ、涙、卵、 |

静岡県大井川上流域におけるアクセント変化 — 無アクセント地域におけるアクセント獲得 —

高さ、二十歳

なお、調査には執筆者の他、愛知教育大学中田敏夫教授、および愛知教育大学学生6名（楓浩幸・加藤えり・高木伸矢・原美奈子・堀田忠孝・舞原美智子）、同大学院生1名（宮田拓史）があたった（学生および院生は調査当時）。この調査を、以下小長井調査と呼ぶ。

II 本川根中学校における面接調査

本川根町立本川根中学校において、Iと同じ項目のアンケート調査を行った後、上記調査と同じ期間に、アクセント、文法の追加項目、言語意識について面接調査を行った。調査法はIと同じである。この調査は小長井調査と比較するため、小長井をふくむ藤川、藤川に隣接し中学校のある田代、小長井とは大井川を隔てた対岸にあり調査当時本川根町役場のあった千頭の3集落の生徒に限った。対象となるのは41名であるが、欠席者等もあり実際に調査を行ったのは、34名である。なお、本川根中学校の生徒数もこの3集落がもっとも多い。調査は小長井調査の調査者が、放課後中学校で行った。

III 静岡市立井川中学校における面接調査

本川根における変化と比較するため、本川根中学校で実施した調査と同じ面接調査を静岡市立井川中学校でも実施した。調査対象は井川中学校全生徒9名である（2004年度は3年生がおらず、1・2年生のみ）が、欠席者があり実際に回答が得られたのは8名である。なお、井川中学校は井川全域が学区となっているが、今回の回答者9名の中に北部地域の生徒はいない。

調査法・調査者は本川根中学校での実施方法と同じである。

3. 語別の結果

まず、小長井調査の結果および本川根・井川中学校における調査の、語ごとの結果の一部を示す（調査語彙全体の結果については木川2006参照）。小長井調査の表は、話者全員の発音を示してある。この表は、話者の出身地を本川根町出身者・川根（川根町と旧中川根町）出身者・静岡県内出身者・静岡県外出

言語科学研究第14号（2008年）

身者に分け、生年を縦軸に並べた。また、上記のように単独2回、助詞付きの単文2回（表の中では助詞と書いてある部分）の発音があるので、それをすべて示した。一方、中学生の結果は同じ発音をした人数を示している。また、発音の現れ方を00/01のように示しているが、/の前が単独、後ろが助詞のついた形のアクセントを示す。たとえば、00/01なら、単独では2回とも途中に下がり目のない発音をし、助詞のついた形では1回は平板、もう1回は頭高の発音をしたことを示している。なお、数字の順は必ずしも発音の順番を表してはいない。1回目が1、2回目に0でも、まとめて01のように示す。

2拍名詞の1類「飴」（表1）と「鼻」（表2）の結果を見てみよう。いずれも県内・県外出身者は単独・単文でアクセントが異なることは少なく、県外出身者の中に京阪式アクセント地域出身者がいるので東京語とは異なる発音もあるが、基本的には東京語と同じアクセントで発音する人が多い。本川根町出身者については「飴」と「鼻」で若干異なる。すなわち、「飴」は各年代とも東京語と同じく平板で発音されることが多いが、「鼻」はゆれが大きい。かつ年代が下がっても尾高が多く見られる。中学生は、両語とも東京語と同じ平板で発音することが多いが、それでも「鼻」の方がゆれが大きい。

次に東京語で尾高型になる2・3類の中から、3類の「花」（表3）の結果を見る。この語については、やはり50歳代以下はほぼ東京語と同じ尾高型で発音されているが、わずかであるが平板との間でのゆれがみられる。これは、おそらく上で見た「鼻」と同音異義語であることによるのではないと思われる。

東京語で頭高型になる4類・5類から、「雨」（表4）を取り上げると、やはり50歳代以下では多くは東京語と同じ頭高で発音される。中学生においてはさらに頭高でゆれることがない（表で②が現れるが、遅下がりと考えれば、これも頭高となる）。上記「鼻」と「花」が同音異義語であるため、若い世代でも若干のゆれがみられたのに対し、「飴」と「雨」では、双方ともあまりゆれがみられない。比較できる同音異義語の対がこれのみであるので、確定的なこととは言えないが、同じ同音異義語でも、助詞が高く続くか低く続くかで対立する平板型と尾高型の方が、単語だけでも区別のできる平板型と頭高型の対より混同を起こさせるものと考えられる。

次に、3拍名詞からは東京語で平板型の「鯨」（表5）と、中高型の「一つ」（表

静岡県大井川上流域におけるアクセント変化 — 無アクセント地域におけるアクセント獲得 —

表1 アクセント「飴」

小長井調査結果

生年	本川根			川根			県内			県外			
	性	単独	助詞	性	単独	助詞	性	単独	助詞	性	単独	助詞	
1910										男	0	1.5	0 0
1918	男	0 0	0 2										
1921							女	0 0	0 0				
1922							女	① 0	0 0				
1924	男	0 N	2 N				女	0 0	0 0	男	① ①	① ①	
1925													
1927	女	0 ①	0 0	女	1 0	② 2							
1928							男	0 0	0 0	女	NN	NN	
1929	男	0 0	0 0	男	NN	NN							
1930							女	0 N	0 N	女	0 N	① N	
1931				男	0 0	0 0							
				女	0 0	0 0							
				女	0 0	0 0							
1932	男	1 1	0 0				女	0 0	0 0				
	女	① 0	① 1										
1933	女	1 1	0 0	女	0 0	0 0							
1934	女	1 1	0 0							男	① ①	① ①	
1935	女	0 N	2 N	女	0 0	0 0	女	0 0	① 0				
1936	女	1 N	0 N										
1937	男	① 0	0 0										
1938	男	1 0	0 0				女	0 ①	0 0				
	男	0 0	0 0										
1939				女	0 N	0 N	男	0 0	0 0				
							男	0 0	0 0				
1941	男	1 N	0 N										
	女	0 1	0 0										
1942										女	0 0	① ①	
1943	女	0 0	2 2	女	0 0	2 2	女	0 0	0 0	女	0 0	0 0	
1945	女	0 0	0 0										
1947	男	0 0	0 2										
1950	女	0 0	0 0										
1951	女	0 0	0 0										
1952				女	0 0	0 0	男	0 0	0 0				
1955	女	0 0	0 0										
1957	男	0 0	0 0										
		0 N	0 N										
		0 0	0 0										
1958	女	0 1	2 1										
1961							男	0 0	0 0				
							女	0 0	0 0				
1962	女	0 0	0 0										
1964	男	0 0	0 0										
1967	女	0 0	1 1										
1968							女	0 0	0 0				
1973				女	0 0	0 2							
1974				女	0 0	0 0							
1983	女	1 0	0 0										
1990	女	1 0	0 0										

単独

0 : ○●

① : ●●

1 : ●○

1.5 : ○○

1.5 : ●●

助詞後接

0 : ○●▲

① : ●●▲

1 : ●○△

2 : ○●△

② : ●●△

N : 未調査

(○△は低く発音することを、●▲は高く発音することを、◎は高から低へ変化することを表す。また、○●は調査語の部分であることを、△▲は調査語につく「が」や「を」等の助詞を表す。なお N は時間的な制約や読みの違いによりアクセントが確認できなかったものである。以下

井川中学校・本川根中学校面接調査結果

	00/00	01/01	01/00	00/01	00/02	11/11
井川 (8)	7					1
千頭 (13)	1 0	1	1		1	
藤川 (13)	1 2		1			
田代 (8)	6		1	1		

(本川根中学校は生徒の居住地域ごとに結果を示す。また、() 内の数は、調査した生徒の総数。以下同様)

言語科学研究第14号（2008年）

表2 アクセント「鼻」

本川根町小長井面接調査結果

生年	本川根			川根			県内			県外		
	性	単独	助詞	性	単独	助詞	性	単独	助詞	性	単独	助詞
1910												
1918	男	0 0	0 0							男	0 1.5	0 0
1921							女	0 ②	0 0			
1922							女	0 0	0 0			
1924	男	1 N	2 N				女	0 0	0 0	男	② ②	② ②
1925												
1927	女	0 0	0 ②	女	1 0	0 ②	女	0 0	0 0			
1928							男	0 0	0 0	女	NN	NN
1929	男	0 0	0 0	男	NN	NN						
1930							女	0 N	0 N	女	0 N	0 N
1931				男	0 0	0 0						
				女	0 0	0 0						
1932	男	1 1	0 0				女	0 0	2 2			
	女	② ②	② ②									
1933	女	1 1	2 ②	女	0 0	0 0						
1934	男	1 1	2 2							男	② ②	② ②
1935	女	1 0	0 0	女	0 0	2 0	女	0 0	0 0			
1936	女	0 N	② N									
1937	男	② 0	2 2									
1938	男	1 1	0 0				女	0 0	0 0			
	男	② 0	2 2				男	0 0	0 2			
1939				女	0 N	0 N	男	0 0	0 0			
1941	男	1 0	0 0									
	女	1 0	0 2									
1942										女	② 0	② ②
1943	女	0 0	2 0	女	0 0	0 0	女	0 0	0 0			
1945	女	0 0	0 2							女	0 0	2 0
1947	女	0 0	2 ②									
1950	女	0 0	0 0									
1951	女	② 0	2 2									
1952				女	0 0	0 0	男	0 0	0 0			
1955	女	0 0	0 0									
1957	男	0 0	2 0									
		0 N	0 N									
		0 0	0 0									
1958	女	0 0	2 2									
1961							男	0 0	0 0			
							女	0 0	0 0			
1962	女	0 0	2 0									
1964	男	0 0	0 2									
1967	女	0 0	2 2									
1968							女	0 0	0 0			
1973				女	0 0	0 0						
1974				女	0 0	0 0						
1983	女	0 0	0 0									
1990	女	0 0	0 0									

単独

0 : ○●

② : ●●

1 : ●○

1.5 : ○◎

1.5 : ●◎

助詞後接

0 : ○●▲

② : ●●▲

1 : ●○△

2 : ○●△

② : ●●△

N : 未調査

井川中学校・本川根中学校面接調査結果

	00/00	00/0 ②	② 0/00	② ②/00	00/② ②	00/20	0 ②/20	00/0N
井川(8)	6	1			1			
千頭(13)	1 1					2		
藤川(13)	8	1		1		1	1	1
田代(8)	5		1		1	1		

静岡県大井川上流域におけるアクセント変化 — 無アクセント地域におけるアクセント獲得 —

表3 アクセント「花」

本川根町小長井面接調査結果

生年	本川根			川根			県内			県外		
	性	単独	助詞	性	単独	助詞	性	単独	助詞	性	単独	助詞
1910										男	1.5	2 2
1918	男	0 1	1 2				女	0 0	2 2			
1921							女	0 0	2 2			
1922												
1924	男	1 N	2 N				女	0 0	2 2	男	1 1	1 1
1925												
1927	女	1 ①	②②	女	1 1	②②	女	0 0	2 2			
1928							男	0 0	2 2	女	NN	NN
1929	男	1 1	②②	男	NN	NN	女	0 N	2 N	女	0 N	2 N
1930												
1931				男	0 0	2 0						
				女	1 ①	1 1						
				女	0 0	2 2						
1932	男	1 1	0 0				女	0 0	2 2			
	女	①①	② 1									
1933	女	1 1	①②	女	0 0	② 1						
1934	女	1 1	0 2							男	① 1	1 1
1935	女	0 1	2 2	女	1 1	1 1	女	0 0	2 2			
1936	女	1 N	2 N									
1937	男	① 0	2 2									
1938	男	1 1	2 2				女	0 0	2 2			
	男	①①	2 2									
1939				女	0 N	2 N	男	0 0	1 2			
							男	0 0	2 2			
1941	男	1 1	0 2									
	女	1 0	② 2									
1942										女	0 0	2 2
1943	女	1 0	2 2	女	0 0	2 2	女	0 0	2 2			
1945	女	0 0	2 2							女	0 0	0 0
1947	男	0 0	0 ②									
1950	女	0 0	2 2									
1951	女	① 0	2 2									
1952				女	0 0	2 2	男	0 0	2 2			
1955	女	①①	2 2									
1957	男	0 0	2 2									
		0 N	② N									
	女	0 0	2 2									
1958	女	0 N	2 2									
1961							男	0 0	2 2			
							女	0 0	0 2			
1962	女	0 0	2 0									
1964	男	0 0	2 2									
1967	女	0 0	2 2									
1968							女	0 0	2 2			
1973				女	0 0	2 2						
1974				女	0 0	2 2						
1983	女	0 0	2 2									
1990	女	0 0	2 2									

単独
0 : ○●
① : ●●
1 : ●○
1.5 : ○○
1.5 : ●○

助詞後接
0 : ○●▲
① : ●●▲
1 : ●○△
2 : ○●△
② : ●●△

N : 未調査

井川中学校・本川根中学校面接調査結果

	00/22	① 0/22	① 0/2 ②	00/②②	00/2 ②	①①/22	00/20	00/00	00/0 ①
井川 (9)	5	3							
千頭 (13)	6	1	1		1			2	1
藤川 (13)	1 0					2	1		
田代 (8)	5	1		1	1				

言語科学研究第14号（2008年）

表4 アクセント「雨」

本川根町小長井面接調査結果

生年	本川根			川根			県内			県外		
	性	単独	助詞	性	単独	助詞	性	単独	助詞	性	単独	助詞
1910										男	1 1	1 1
1918	男	1 0	1 ②									
1921							女	1 1	1 1			
1922							女	1 1	1 1			
1924	男	1 N	2 N							男	1.5 1.5	② 2
1925							女	1 1	1 1			
1927	女	0 1	0 ②	女	① 0	2 2						
1928							男	1 1	2 0	女	NN	NN
1929	男	① ①	1 ②	男	NN	NN						
1930							女	1 N	1 N	女	1 N	② N
1931				男	0 0	0 0						
				女	1 1	1 1						
				女	1 1	1 1						
1932	男女	1 1	0 0				女	1 1	1 1			
		① ①	1 ②									
1933	女	1 1	0 0	女	1 1	1 1						
1934	男女	1 1	0 0							男	① 1.5	2 ②
1935	女	1 0	0 0	女	① 1	1 1	女	1 1	1 1			
1936	男女	0 N	② N									
1937	男	0 0	0 0									
1938	男	① ①	0 0				女	1 1	1 1			
	男	0 ①	① 0									
1939				女	1 N	1 N	男	1 1	1 1			
							男	1 1	1 1			
1941	男女	1 ①	1 0									
		1 0	0 0									
1942										女	0 0	1 1
1943	女	0 0	2 2	女	0 0	2 0	女	1 1	1 1	女	1 1	1 1
1945	女	1 1	1 1									
1947	男	0 0	② ②									
1950	女	1 1	1 1									
1951	女	① 1	1 1									
1952				女	1 1	1 1	男	1 1	1 1			
1955	女	1 1	1 1									
1957	男	1 1	1 ②									
		1 N	2 N									
	女	1 1	1 1									
1958	女	1 1	1 1									
1961							男	1 1	1 1			
							女	1 1	1 1			
1962	女	0 1	1 ②									
1964	男	1 1	1 1									
1967	女	1 1	1 1									
1968							女	1 1	1 1			
1973				女	1 1	1 1						
1974				女	1 1	1 1						
1983	女	1 1	1 1									
1990	女	1 1	1 1									

単独
0 : ○●
① : ●●
1 : ●○
1.5 : ○○
1.5 : ●○

助詞後接
0 : ○●▲
① : ●●▲
1 : ●○△
2 : ○●△
② : ●●△

N : 未調査

井川中学校・本川根中学校面接調査結果

	11/11	11/1 ②	11/② ②	1N/1N	10/11	1 ①/11
井川(8)	5		1		1	1
千頭(13)	1 1	1	1			
藤川(13)	8	3	1	1		
田代(8)	4	3	1			

静岡県大井川上流域におけるアクセント変化 — 無アクセント地域におけるアクセント獲得 —

表5 アクセント「鯨」

本川根町小長井面接調査結果

生年	本川根			川根			県内			県外		
	性	単独	助詞	性	単独	助詞	性	単独	助詞	性	単独	助詞
1910										男	0 0	0 0
1918	男	0 0	0 1									
1921							女	1 1	1 1			
1922							女	1 1	1 1			
1924	男	2 N	② N				女	1 1	0 1	男	2 2	2 2
1925												
1927	女	1 1	2 2	女	1 ②	2 2	男	1 1	②②	女	NN	NN
1928												
1929	男	②②	②②	男	NN	NN	女	1 N	1 N	女	0 N	① N
1930												
1931				男	0 0	0 0						
				女	1 1	1 1						
				女	2 0	1 ①						
1932	男	2 0	0 0				女	1 1	1 1			
	女	1 ①	②②									
1933	女	1 2	0 0	女	0 1	0 0						
1934	男	2 2	0 ①							男	2 ②	2 ②
1935	女	1 1	0 0	女	0 0	0 0	女	1 1	1 1			
1936	女	1 N	① N									
1937	男	0 0	0 0									
1938	男	0 2	0 0				女	1 1	0 0			
	男	0 0	② 0									
1939				女	2 N	1 N	男	1 ①	1 0			
							男	0 0	0 0			
1941	男	1 0	0 2									
	女	② 2	0 2									
1942										女	1 1	1 1
1943	女	0 2	0 2	女	0 0	0 0	女	0 0	0 0			
1945	女	2 0	0 0							女	2 0	1 1
1947	男	0 0	2 2									
1950	女	0 0	0 0									
1951	女	0 0	0 0									
1952				女	0 0	① 0	男	0 1	0 0			
1955	女	① 0	0 0									
1957	男	0 0	0 0									
		0 N	0 N									
	女	0 0	0 0									
1958	女	0 ①	2 0									
1961							男	0 0	0 0			
							女	0 0	0 0			
1962	女	0 0	0 0									
1964	男	0 0	0 0									
1967	女	0 0	0 0									
1968							女	0 0	0 0			
1973				女	0 0	0 0						
1974				女	0 0	0 0						
1983	女	0 0	0 0									
1990	女	0 0	0 0									

単独

0 : ○●●

① : ●●●

1 : ●○○

2 : ○●○

② : ●●○

2.5 : ○●◎

助詞後接

0 : ○●●▲

① : ●●●▲

1 : ●○○△

2 : ○●○△

② : ●●○△

3 : ○●●△

③ : ●●●△

N : 未調査

井川中学校・本川根中学校面接調査結果

	00/00	0 ①/00	0 ①/① 0	00/0 ①	0N/0N	② 0/00	11/11	02/00
井川 (8)	2	3	1	1		1		
千頭 (13)	1 1			1				
藤川 (13)	1 2				1		1	
田代 (8)	6	1						1

言語科学研究第14号（2008年）

表6 アクセント「一つ」

本川根町小長井面接調査結果

生年	本川根			川根			県内			県外		
	性	単独	助詞	性	単独	助詞	性	単独	助詞	性	単独	助詞
1910	男	2 2	2 2							男	2 2	2 2
1918							女	2 2	2 2			
1921							女	2 2	2 2			
1922												
1924	男	2 N	③ N				女	2 2	2 2	男	2 ②	② ②
1925												
1927	女	0 2	2 2	女	2 2	2 2	女	2 2	2 2	女	NN	NN
1928							男	2 2	2 2			
1929	男	2 2	2 2	男	NN	NN	女	2 N	2 N	女	2 N	2 N
1930												
1931				男	2 2	0 0						
				女	2 2	2 2						
				女	2 2	2 2						
1932	男	2 2	0 0				女	2 2	2 2			
	女	2 2	2 2									
1933	女	2 2	0 0	女	2 2	2 2						
1934	女	2 2	0 0							男	② ②	② ②
1935	女	② 2	0 3	女	2 2	2 2	女	2 2	2 2			
1936	女	2 N	2 N									
1937	男	2 2	0 0									
1938	男	2 2	0 0				女	2 2	2 2			
	男	2 2	2 2				男	2 2	2 2			
1939				女	2 N	2 N	男	2 2	2 2			
1941	男	2 2	2 0									
	女	2 2	2 2									
1942										女	2 2	2 2
1943	女	2 2	2 2	女	2 2	0 0	女	2 2	2 2	女	2 2	2 2
1945	女	2 2	2 2									
1947	男	2 2	2 2									
1950	女	2 2	2 2									
1951	女	2 2	2 2									
1952				女	2 2	2 2	男	2 2	3 3			
1955	女	2 2	2 2									
1957	男	2 2	2 2									
		2 N	2 N									
	女	2 2	2 2									
1958	女	2 2	2 2									
1961							男	2 2	2 2			
							女	2 2	2 2			
1962	女	2 2	2 2									
1964	男	2 2	2 2									
1967	女	2 2	2 2									
1968												
1973				女	2 2	2 2	女	2 2	2 2			
1974					2 2	2 2						
1983	女	2 2	2 2									
1990	女	2 2	2 2									

単独
 0 : ○ ● ● ●
 ① : ● ● ● ●
 1 : ● ○ ○ ○
 2 : ○ ● ○ ○
 ② : ● ● ○ ○
 2.5 : ○ ● ● ●
 助詞後接
 0 : ○ ● ● ● ▲
 ① : ● ● ● ● ▲
 1 : ● ○ ○ ○ △
 2 : ○ ● ○ ○ △
 ② : ● ● ○ ○ △
 3 : ○ ● ● ○ △
 ③ : ● ● ● ○ △
 N : 未調査

井川中学校・本川根中学校面接調査結果

	22/22	22/② 2	2N/2N
井川(8)	7	1	
千頭(13)	1 3		
藤川(13)	1 2		1
田代(8)	8		

静岡県大井川上流域におけるアクセント変化 — 無アクセント地域におけるアクセント獲得 —

6) を見ておこう。まず、「鯨」であるが、川根出身者および県内出身者には、平板型の他に頭高型が多く見える。「鯨」を頭高で発音する地域は、静岡県の特に西部に広い(山口1987)、その反映であろう。しかし、中学生をはじめ、若い世代は東京と同じ平板で発音している。これは、周辺地域のことばの影響を受けず、東京のアクセントをそのまま受け入れたということになり、テレビなどによる東京語の影響と考えることもできる。しかし、川根出身者や県内出身者にも特に若い世代に平板が多く現れており、この変化が本川根に限ったことではなく、この地域の周辺で広く起こっている変化ではないかと考えられる。

東京語で中高型になる「一つ」は高年層も含め中高が多く現れる。若い世代の中高は、他の型の語と同様、東京や静岡市などの言葉と同じ発音への変化の一環と見ることができる。それに対し高年層の中高は、この地域においてアクセントは語によって異なることはないが、通常発音する場合、中高あるいは平板で発音されることが多いことによるものと考えられる。

4. 話者の属性による異なり

次に、話者の属性による違いについて見てみよう。

まず、出身地による違いについて見ると、川根出身者の中に、わずかではあるがアクセントがゆれている話者がある。これは川根出身者に含めてある中川根町にも一部無アクセントの地域があり、その出身者もあるためであろう(今回は、それぞれの出身地域のアクセントの状況は考慮に入れず、行政区分によってのみ分類した)。さらに、上記のように県外出身者には近畿地方出身者がいるため京阪式の発音が見られる。このように若干の例外はあるが、多くは東京語と同じ発音で、単語ごとの揺れは少ない(ただし、雀、鯨、心、二十歳などの語は出身地による違いが大きい)。すなわち、本来無アクセントの地域ではあるが、地域の中では東京語に似たアクセントが比較的良く聞かれるわけである。

次に、本川根町出身者についてであるが、上にも述べたように、語ごとに見ると、50歳以下あたりからアクセントが安定しており、高年層においては伝統的な無アクセントで、同じ語でも発音のたびにアクセントが異なる場合が多い。そこで、本川根町出身者のみを取りだし、単語単独2回と助詞付き2回の発音

言語科学研究第14号（2008年）

が同じであるか異なるかという観点からまとめた。その結果が表7である。この表では、4回の発音が同じでさらにそれが東京語のアクセントと同じであれば◇（単独で下がり目のない場合は、助詞が後接したときの発音が尾高でも平板でも、アクセントは同じであるとする。3拍の場合も同様）、4回の発音が同じであるが東京語のアクセントと異なる場合△（静岡市内や下流の金谷や島田と同じでも、東京語と異なれば△になる）、1回でも異なる発音があれば◆、調査時間の都合や読みの間違いなどで発音が4回分ない場合にはNとしている。また、集計表で②で示した2拍目の途中で下がる場合は、遅下がりと判断し、1としている。したがって集計の表で単独が11で助詞付きが②②の場合、この表では一定の発音として処理している。また、②以外で1拍目から高い③や④は、1拍目が低い発音の3や0と同じとして集計している。

さて、この表で見ると、高年層では発音によりアクセントが異なることが多く、下の年代になると一定のアクセントで発音される場合が多くなるという状況が明らかである。その境界は生年が1940年代あたりのようである。ここで、生年を馬瀬（1981）を参考に1944年以前と1945年以降で分けて集計してみると、1944年以前生まれの話者の東京語と同じ型で一定の発音の割合が2拍名詞で16.1%、3拍名詞で17.4%、東京語と異なる型で一定している場合を含めても、2拍名詞29.9%、3拍名詞26.7%であるのに対し、1945年以降生まれの話者は東京語と同じ型で一定が2拍名詞77.2%、3拍名詞69.8%、東京語と異なる型で一定も含めると2拍名詞82.7%、3拍名詞70.9%にのぼる。これは、馬瀬（1981）において、「昭和20年以後出生者とその前の出生者との間にまさにドラスティックともいえる断層のある」（p.13）ことが分かるとしているのに照応する。しかし、後者の人数が少ないので、年齢や男女などによる異なりをより詳細に見ることはできない。

次に、中学生の結果についてみる。まず、本川根と井川の違いであるが、2拍名詞において東京語と同じ型で一定の発音がなされる割合が本川根中学校では91.6%、井川中学校では89.9%で、両校の間に有意な差はない。また、3拍名詞も本川根中学校86.0%、井川中学校86.5%とほとんど差がない。10～15%程度一定ではないというのは、他の有型アクセントの地域からすれば多いと言えるかもしれないが、やはりいずれの地域においても中学生におけるア

静岡県大井川上流域におけるアクセント変化 ― 無アクセント地域におけるアクセント獲得 ―

表7 東京語と同じ型の安定度 小長井調査

生年	性別	飴	鼻	胸	歌	犬	花	糸	肩	雨	秋	雀	鯨	苺	背中	男	表	頭	力	心	一つ	卵	涙	高さ	二十歳	
1918	男	◆	◇	◆	◆	◆	◆	△	△	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	△	◆	△	◇	◆	◆	◇	△	
1924	男	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	
1927	女	◇	◇	◇	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◇	◆	◇	◆	◆	◆	◆	◆	
1929	男	◇	◇	△	◇	◆	◆	◆	◆	◆	◇	◆	△	◆	△	◆	△	◆	◆	△	◇	◇	△	◇	◆	
1932	男	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	
	女	◆	◆	◇	◆	◇	◆	◆	◆	◆	△	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◇	◆	◆	◇	◆	◆	◆	◆	
1933	女	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	
1934	男	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	N	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	
1935	女	N	◆	◆	◆	△	◆	◆	◆	◆	◆	◇	◇	◇	◆	△	△	△	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	
1936	女	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	
1937	男	◇	△	△	△	△	◇	◆	◆	△	◆	◇	◇	◇	◇	◆	△	◆	◆	△	◆	◆	◆	◆	◆	
1938	男	◆	◆	◇	◆	◆	◆	◆	◇	△	◆	◇	◇	◇	◆	◆	◆	◆	△	◆	◆	◆	◆	◆	◆	
	男	◇	△	◇	◇	◆	◇	△	△	△	N	◇	◇	◇	◆	◆	◇	◇	△	◇	◆	◆	△	◆	◆	
1941	男	N	◆	◇	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◇	◇	◇	◆	◆	◇	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	
	女	◆	◆	◆	◆	◇	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◇	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◇	◆	△	◆	◆	
1943	女	△	◆	◇	◇	△	◆	◆	△	△	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◇	◆	◆	◇	◆	◆	△	◆	
1945	女	◇	◆	◆	◇	◇	◇	△	◇	◇	◇	◇	◇	◇	◆	◆	◆	◇	◇	◆	◇	◆	◆	◇	◇	
1947	男	◆	△	◇	◇	◇	◆	△	◆	△	◇	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◇	◇	◆	◇	◆	◆	◆	◇	
1950	女	◇	◇	◇	◇	◇	◇	◇	◇	◇	◇	◇	◇	◇	◇	◇	◆	◆	◆	◆	◇	◇	◇	◇	◇	
1951	女	◇	△	◇	◇	◇	◇	◇	◇	◆	◇	◇	◇	◇	◇	◇	◇	◆	△	◆	◇	◇	◇	◆	◆	
1955	女	◇	◇	◇	◇	◇	◇	◇	◇	◇	◇	◇	◇	◇	◇	◇	◇	◆	◇	◆	◇	◆	◇	◇	◇	
1957	男	◇	◆	◇	◇	◇	◇	◇	◇	◇	◇	◇	◇	◇	◇	◇	◇	◇	◇	◆	◇	◇	◇	◆	◇	
	男	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	
	女	◇	◇	◇	◇	◇	◇	◆	◆	◇	◇	◇	◇	◇	◇	◇	◇	◇	◇	◆	◇	◇	◇	◇	◇	
1958	女	◆	△	◇	◇	N	N	◆	◇	◇	◇	N	N	N	◆	◆	◆	△	◇	◆	◇	◆	◇	◆	◆	
1962	女	◇	◆	◇	◇	◇	◆	◆	◆	◆	◇	◇	◇	◇	◇	◇	◆	◆	◆	◆	◇	◆	◆	◆	◆	
1964	男	◇	◆	◇	◇	◇	◇	◇	◆	◆	◆	◇	◇	◇	◇	◇	◇	◇	◇	◆	◇	◆	◆	◆	◇	
1967	女	◆	△	N	◇	◇	◇	◆	◆	◆	◆	◇	◇	◇	◇	◇	◇	◇	◇	◆	◇	◆	◆	◆	◇	
1983	女	◆	◇	◇	◇	◇	◇	◇	◇	◇	◇	◇	◇	◇	◇	◇	◇	◆	◆	◆	◇	◆	◆	◆	◇	
1990	女	◆	◇	◇	◇	◇	◇	◇	◇	◇	◇	◇	◇	◇	◇	◇	◇	◆	◆	◆	◇	◆	◆	◆	◇	
1944	以前生	◇	4	3	6	3	2	2	0	1	0	1	5	5	6	1	1	1	4	0	2	6	1	0	2	0
	まれ	△	1	2	2	2	2	0	2	3	4	1	0	1	0	1	1	3	2	2	3	0	0	3	1	1
	◆	7	9	6	9	10	12	12	10	10	11	9	8	8	12	12	10	7	12	9	8	13	11	11	13	
1945	以後生	◇	8	5	11	13	12	10	8	9	10	12	11	11	11	10	11	8	6	9	1	13	7	10	7	10
	まれ	△	0	4	0	0	0	0	2	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0
	◆	5	4	1	0	0	2	3	4	2	1	1	1	1	3	2	5	6	3	12	0	6	3	6	3	
合計	◇	12	8	17	16	14	12	8	10	10	13	16	16	17	11	12	9	10	9	3	19	8	10	9	10	
	△	1	6	2	2	2	0	4	3	5	1	0	1	0	1	1	3	3	3	3	0	0	3	1	1	
	◆	12	13	7	9	10	14	15	14	12	12	10	9	9	15	14	15	13	15	21	8	19	14	17	16	
	計	25	27	26	27	26	26	27	27	27	26	26	26	26	27	27	27	26	27	27	27	27	27	27	27	27

◇：東京語と同じ型で一定 △：東京語と違う型で一定 ◆一定しない

言語科学研究第14号（2008年）

表8 東京語と同じ型の安定度 中学生調査

		飴	鼻	胸	歌	犬	花	糸	肩	雨	秋	雀	鯨	苺	背中	男	表	頭	力	心	一つ	卵	涙	高さ	二十歳
本川根	◇	28	28	32	31	31	29	30	31	33	32	31	31	25	32	30	33	14	24	23	33	28	34	32	30
	△	0	0	0	0	0	3	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	2	1	0	0	0	0	0	0
	◆	6	5	1	2	3	2	4	2	0	0	3	1	8	0	3	0	17	9	10	0	6	0	1	3
	計	34	33	33	33	34	34	34	33	33	32	34	33	33	32	33	33	33	34	33	33	34	34	33	33
井川	◇	7	7	7	8	7	8	5	8	6	8	8	7	6	7	7	7	7	6	7	8	7	6	7	6
	△	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0
	◆	0	1	1	0	1	0	2	0	2	0	0	1	2	0	1	0	1	1	0	0	1	2	1	2
	計	8	8	8	8	8	8	7	8	8	8	8	8	8	8	8	7	8	8	8	8	8	8	8	8

クセントの獲得は非常に進んでいると言えるであろう。さらに、本川根中学における男女差について、単独2回、単文2回のそれぞれの発音が東京語と同じであれば1点とし合計96点で、総得点を比較すると、男子生徒の平均87.11点標準偏差3.95であるのに対し、女子生徒は平均91点標準偏差3.70である。これは、t検定によって1%水準で差が認められる。この結果も馬瀬（1981）で、「無アクセントの有型化にあたっては、女子の方が男子よりもその傾向の著しい」（p.16）という指摘と合致する。なお、アクセント獲得における性差について、栃木県宇都宮市における調査を分析した佐藤亮一（1984）は、有意差の有無については述べていないが、「男の方がやや大きい数値を示している」（p.230）としており、今回の結果とは異なる。方言の変化について、女性の方が標準的な形への変化がはやいとされることが多いという事からすれば、本調査の結果はこれと同じ動きと見る事が出来るが、地域差などがある可能性もある。

5. アクセント型による異なり

東京語と同じ発音に変化に関わる要因としては、話者の属性の他に、語による違いも考えられる。語の中には、小長井調査の本川根町出身者の場合、3名しか一定のアクセントで発音しない「心」のような語もあれば、「一つ」のように19名が同じアクセントで発音する語もある。そこで、東京語のアクセントの型ごとに違いを見てみよう。

まず、2拍名詞についてみると、1944年以前生まれの話者(図1)においては、平板と中高となる1類と2・3類の語が、東京と同じ型で一定に発音される割

静岡県大井川上流域におけるアクセント変化 ― 無アクセント地域におけるアクセント獲得 ―

合が高い。しかし、これは上記のようにアクセントの区別のないこの地域において、通常多く発音されるパターンであり、アクセントの点で他の語と区別されるものではない。それに対し1945年以降生まれの話者（図2）は、全体に東京語と同じ型での発音の割合が多くなっているが割合としては尾高が、増加率としては頭高が増加している。それが中学生（図3）になると、頭高が最も多くなる。ただし、2・3類と4・5類に有意な差は認められない。なお、平板で一定が少ないのは、調査語が「鼻」と「飴」という、アクセントの異なる同音異義語をもつ語のみであったという点によるところが大きいとも考えられる。これは、1945年以降生まれの話者の結果についても同様である。

3拍名詞も同様に処理して図示したのが、図4から図6である。なお、東京語で平板型の語としたのは「鯨、苺、背中」、尾高型としたのは「男、表、頭、力、心」（「心」は東京語として中高もあり、秋永一枝2002では尾高型を「地域的」な型であるとしている。しかし、今回の調査では若年層で安定しているのは尾高で、中高で安定している話者はなかった。そこで、ここでは尾高型を東京語のアクセントとして集計する）、中高型としたのは「一つ、卵」、頭高型

図1 2拍名詞（小長井調査 1944年以前生まれ）

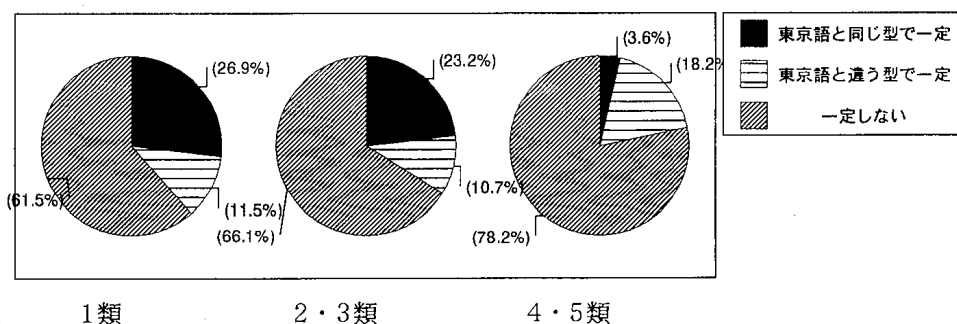
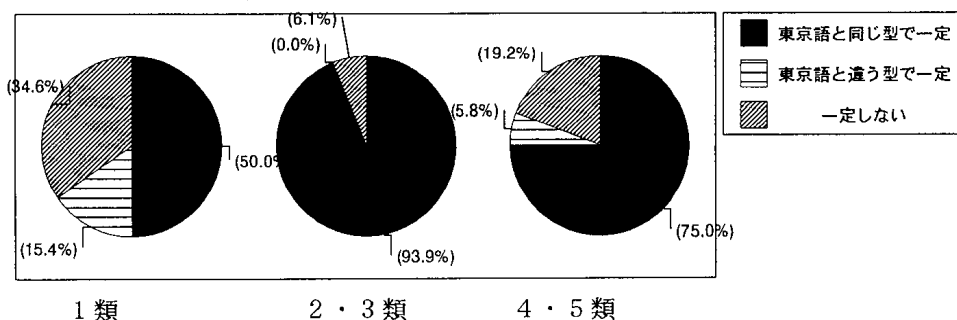
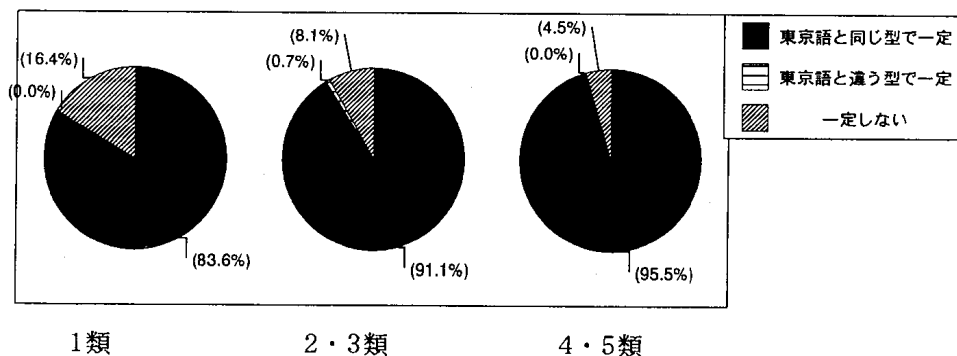


図2 2拍名詞（小長井調査 1945年以降生まれ）



言語科学研究第14号（2008年）

図3 2拍名詞(本川根中学校調査)



が「涙、高さ、二十歳」である。この中で、中学生を除けば、東京語で平板型の語が一定のアクセントで発音されることが多い。また、中高がこれに続く。これも前述のように、無アクセントの当地域において最も良く現れる発音がこれらである事によるものと考えられる。それに対し、1945年以降生まれの話者においては、どの型も、少ない場合でも半数以上が東京語と同じ型で発音されるようになり、平板・中高について頭高で一定である割合が高く、尾高が最も低い。この頭高の変化は、1944年以前生まれの話者において、頭高が5%にも満たないのと比べると、非常に大きい。さらに、中学生の場合、頭高が最も安定度が高い。そして、その他の型も一定しない割合が10%を切る中で、尾高での安定度がやや低い。平板型との対比の上で、区別が困難であるということであろうか。

以上のように、どの語が安定したアクセントで発音されることが多いかと言うことが、小長井調査と中学生の調査では異なる。すなわち、一定のアクセントで発音されることの多い語が、2拍名詞では、小長井調査が尾高の2・3類であるのに対し、中学生は頭高の4・5類、3拍名詞では小長井調査が東京語で平板となる語であるのに対し、中学生では頭高となる語である。アクセントの安定的な発音が獲得しきれていない世代では、中高・尾高や平板のように偶然東京語と同じ発音になることがある語の方が、結果的に一定となることが多いが、さらに下の世代になると、中高や平板との違いの大きい頭高が先に習得され、平板と尾高のように類似した発音の区別の方が習得が難しいということであろうか。

さて、無アクセントの地域においてアクセントを獲得していく場合、どのよ

静岡県大井川上流域におけるアクセント変化 — 無アクセント地域におけるアクセント獲得 —

図4 3拍名詞（小長井調査 1944年以前生まれ）

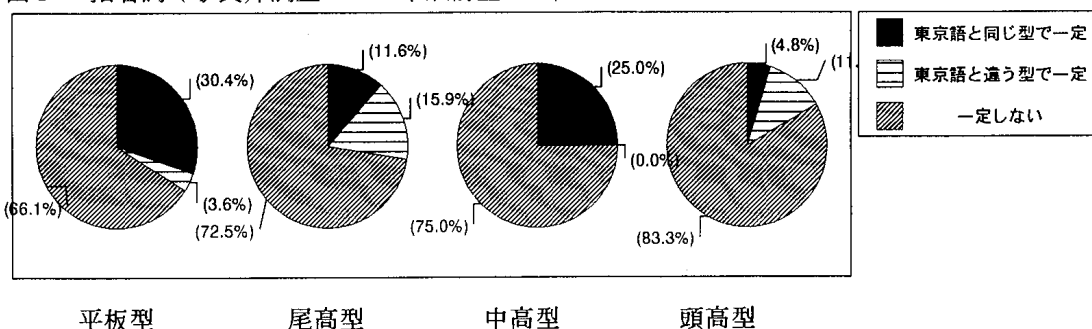


図5 3拍名詞(小長井調査 1945以降生まれ)

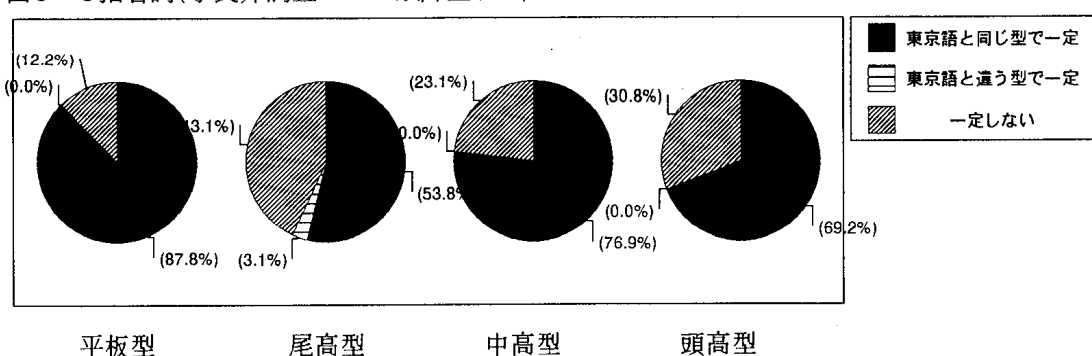
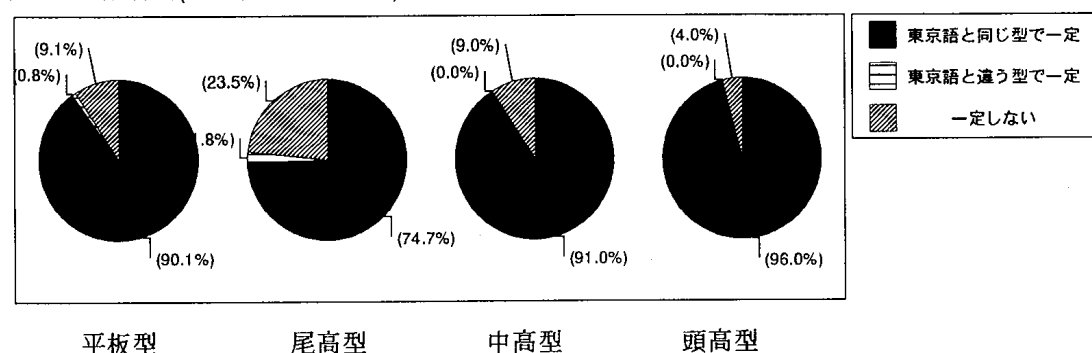


図6 3拍名詞(本川根中学校調査)



うな語から獲得していくのかについては、先行研究がある。

まず、隣接する井川においての調査結果をまとめた中條（1983b）は、井川における変化として「型の知覚または型の獲得は、頭高型が最も容易で、次いで平板型・中高型が続き、尾高下型はかなり困難である。また、（中略）名詞では3拍語が比較的容易だという傾向が認められる」（p.13）としている。今

言語科学研究第14号（2008年）

回の結果は、獲得される順番はこの結果と基本的に同じであったということになる。ただし、2拍名詞と3拍名詞の比較では、1945年以降生まれの話者でも中学生でも、2拍名詞の方が東京語と同じ型で発音で一定の割合が高い。しかし、有意な差が認められるほどの差ではなく、拍数による違いは確認できない。

馬瀬（1981）・中條（1983b）以外にも、東日本の無アクセント地域におけるアクセントの獲得（あるいは共通語化）については、いくつかの報告がある。その一つである、栃木県氏家町（現さくら市）を調査した石川玲子・板倉紫乃・塩澤博子・中村孝子（1988）は、共通語と同じ型が表れやすいのは、中條（1983b）の結果と同じく、「アクセントは頭高型が最も現れやすく、次いで平板型、そして尾高下型の順となり、平板型と尾高下型との間でゆれがみられる」（p.114）としている。これに対し、前述の佐藤（1984）では、「『文』の型で発話したときには、共通語のアクセント型との一致はまず中高型について見られ、次いで平板型が現れ、頭高型は比較的現れにくく」（p.222。なお、この調査は2拍名詞を調査しているので、「中高型」は尾高型あるいは尾高下型になる）としており、同じ栃木県における調査でも結果が異なり、また、今回の調査結果や上記中條（1983b）とも異なる。無アクセント地域においてアクセントが獲得されていく場合、どのような語から獲得されていくのか、一定の傾向があるのか、地域すなわち無アクセントのあり方による違いがあるのか、調査法などによる異なりはどうか、あるいは上記のようなアクセントを獲得していく過程に関する違いがあるのかなど、検討すべき点が多い。

6. 意識調査との関連

今回は、アクセントを含め語彙・文法・意識などについても調査を実施した。ここで、アクセントの変化と他の事象について比較してみると、語彙・文法項目は、全体的に共通語化が進んでおり、調査時点で70代以上は比較的伝統的な方言体系を保持しているが、60代以下では共通語化がめだつ。ただ、それぞれの形式により共通語形式が多く用いられるようになる年代は異なり、アクセントと同様1940年代生まれが境界となるような現象はあまりない。その中では、推量を表す形式ズラの不使用（ズラではなくダラを用いるようになる。木川2006参照）などはこれに当たるかもしれない。しかし、当然、アクセント

静岡県大井川上流域におけるアクセント変化 — 無アクセント地域におけるアクセント獲得 —

の獲得とズラからダラへの変化が関係を持つとは考えられない。このほかに1940年代生まれで境界があるように思われる項目としては、「共通語を話す自信があるか」についての自己評価がある。この結果が表9である。この集計では本川根町出身者以外の結果も示した。また、表10に各グループの集計を示し、さらに、「自信がある」を3点、「少しならある」を2点、「あまりない」を1点、「全然ない」を0点とした平均点を示した。この平均点から見ると、三つのグループに分けることができる。平均点の最も高いのは川根・本川根以外の県内・県外出身者である。次いで、1945年以降生まれおよび中学生である。中学生は本川根中学校も井川中学校もほとんど差がない。そして最も平均点が低い、すなわち共通語を話す自信が最も無いのが1944年以前生まれと川根出身者である。川根出身者が1944年以前生まれとグループをなすのは、川根出身者の多くが1944年以前生まれであることによると思われる。すなわち、地域差ではなく、世代差の現れである。さて、本川根町出身者で、自信のある人が1945年以降生まれに多くなる背景には、全体的な変化としての語彙や文法項目の共通語化と共に、共通語や周辺地域の方言との相違点として大きいアクセントが次第に獲得されているという点が関与している可能性が高いのではないかと考えらる。

7. まとめ

今回の調査は、上記のようにアクセントのみの調査ではなかったため、アクセントの調査項目は多くなく、また調査法も読み上げ式のみである。したがって、早計に結論を出すのは慎まなければならない。しかし、この地域におけるアクセント獲得は、かなり進んでいるとあって良からう。久野マリ子（2001）は、八丈島における調査において、「調査項目では、ほぼ完全に東京アクセントで答えた高校生が、通学バスの中では昔ながらの無アクセントの話調で友達と話していた」（p.70）というようなことがあるとしている。しかし、本川根における若年層のアクセントの獲得は、確固としたものになりつつあると考えられる。今回中学校において、授業および、教員を含めたものではあるが自然談話の録音をしたが、その中の本川根中学校女子生徒と教員の自然談話では、以下のような会話もなされていた（C B Dはそれぞれ話者記号で、いずれも生

言語科学研究第14号（2008年）

表9 共通語を話す自信

本川根町小長井面接調査結果

生年	本川根		川根		県内		県外	
	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性
1910							■	
1918	↑							
1921						┌		
1922						■		
1924	↑						■	
1925						↑		
1927		▲		↑				
1928	▲				■			■
1929	▲		↑			▲	■	
1930								
1931			↑	↑・↑				
1932	↑	┌				■		
1933		↑		↑				
1934	↑			■		■		↑
1935		↑						
1936		↑						
1937	↑					■		
1938	■・■				■・┌	■		
1939			▲		■・┌			
1941	↑	↑						
1942								↑
1943		↑	↑			■		
1945		↑					■	
1947	■							
1950		↑						
1951		■						
1952			▲		▲			
1955								
1957	■・↑	▲						
1958		■						
1961					↑	↑		
1962		■						
1964	↑							
1967		↑				↑		
1968								
1973			↑					
1974			▲					
1983		▲						
1990		↑						

- ある
- ▲ 少しならある
- ↑ あまりない
- ↑ 全然ない
- ┌ 分からない

（生年が同じで性別も同じ場合は、横に並べ、間に「・」を入れて示す）

井川中学校・本川根中学校面接調査結果

	┌	↑	↑	▲	■
井川(8)	0	2	0	4	2
千頭(13)	0	0	6	4	3
藤川(13)	1	1	4	5	2
田代(8)	0	1	2	2	3

表10 共通語を話す自信があるか（属性別）

	ある	少しならある	あまりない	全然無い	分からない	平均点
1944年以前生まれ	2	2	4	7	1	0.93
1945年以降生まれ	6	2	2	4	0	1.71
本川根中学校	8	11	12	2	1	1.76
井川中学校	2	4	0	2	0	1.75
川根出身	1	3	3	4	1	1.09
県内出身	7	2	2	2	2	2.08
県外出身	5	0	1	1	0	2.29

静岡県大井川上流域におけるアクセント変化 — 無アクセント地域におけるアクセント獲得 —

徒である。また教員との会話であるが、改まった会話ではなく、当地の中学生の自然な会話であったと考えられる。なお、以下の「は高くなることを、」は低くなることを表す）。

C アノ [サ] — [ク] ツッテ [サ] — [ク] ツダヨ [ネ] —。 [ナ] シカ ○○ワ (B ク [ツ] ッテ [ユー] ヨ [ネ]) (D ジャ ク [ツ] ド [コ] ッテ) [ア] トネ [ー [サ] ラミオ ウ [チワ サ] ラミッテユ] ー نداケン [ド] — サ [ラミッテ ミ [シナユ] ー ンダヨ。(B ウ [チ サ [ラミダ] ヨ) (D サ [ラミ] サ [ラミジャナ] イ [サ] ラミッテユ] ーヨ。(B チ [ガウ] ンダー) (D [ド] ッチガホントーナ] ノカ ワ [カン] ネー [ナ] —)

ここで「靴」と「サラミ」のアクセントを話題にしているが、「靴」のアクセントは話者Cと他の生徒は同じであるが、「サラミ」は生徒によって異なる。「靴」はクが無声化しないということもあって東京語とは異なるが、この地域の中学生の多くは頭高で安定している(○○は本川根町出身ではない生徒)。「サラミ」は東京語でも両方の発音があり、その反映がここにも見られるということであろう。いずれにせよ、それぞれ自分のアクセントを認識した上で、他人の発音が自分と異なることがあるということも認識している。これは、この中学生たちが、すでにかなり安定したアクセントを獲得していることの一つの証であろう。

お忙しい中調査にご協力いただいた本川根町教育委員会・本川根中学校・井川中学校の先生方および生徒の皆さん、小長井の皆さんに感謝いたします。

なお、本研究は平成15～17年度科学研究費補助金（基盤研究（C））「静岡県下『言語の島』における言語変容に関する基礎的研究」によるものである。

参考文献

石川玲子・板倉紫乃・塩澤博子・中村孝子 1988「無アクセント地域におけるアクセントの共通語化—栃木県氏家町の調査から—」『群馬県立女子大学国文学研究』8、110-115

言語科学研究第14号（2008年）

- 木川行央 1997～2006「大井川・安倍川流域方言の言語地理学的研究（1）～（7）」静岡県方言研究会『静岡・ことばの世界』1～7
- 木川行央 2002「方言分布から見た大井川・安倍川流域－大井川・安倍川流域言語地図から－」『神田外語大学言語科学研究センター紀要』1、109-132
- 木川行央 2006『静岡県下『言語の島』における言語変容に関する基礎的研究』科学研究費補助金（基礎研究C）研究成果報告書
- 久野マリ子 2001「無アクセント方言における共通語アクセントの習得と要因」『国語研究』64、64-74
- 佐藤亮一 1984「無型アクセント地域におけるアクセントの共通語化－宇都宮市における小調査の結果から－」平山輝男博士古稀記念会編『現代方言学の課題・第2巻』明治書院、211-234
- 寺田泰政 1971「アクセントによる細かい方言区画－遠州の方言を例として－」『金田一博士米寿記念論集』三省堂、359-381
- 中條修編 1982『静岡方言の研究』吉見書店
- 中條 修 1983a「静岡県の方言」飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一編『講座方言学6 中部地方の方言』国書刊行会、141-176
- 中條 修 1983b「無アクセント地域における青少年層のアクセントの動向 静岡市井川方言の場合」『静岡大学教育学部研究報告人文社会』第33号、1-15
- 中條 修 1989「静岡県中川根町のアクセント－特殊アクセントとその周辺－」『静岡学園短期大学研究報告』第2号、9-27
- 馬瀬良雄 1981「言語形成に及ぼすテレビおよび都市の言語の影響」『国語学』125号、1-19
- 山口幸洋 1987「アクセント」静岡県方言研究会・静岡大学方言研究会共編『図説静岡県方言辞典』吉見書店、23-40